

疲れた者(*)、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。
休ませてあげよう。(マタイ福音書11の28)

(*) 疲れた者の原語は、コピアオーで、これは、「労苦する、(夜通し) 働く、疲れる」のように訳されている言葉である。

Come to me, all you that are weary and are carrying heavy burdens,
and I will give you rest.

ここには、万人に対する招きの言葉がある。この世に生きるということは、さまざまの苦労や心身の疲れ、また苦しみが伴う。それは、魂の最も深い問題としての罪ゆえの苦しみであり、また病気であり、家族の問題、友人や職場の人間関係による苦しみ、そして災害や事故による悲しみや重荷、そして老年になれば孤独や、病気、周囲から軽視されあるいは邪魔者扱いさえされるようになる苦しみ、そして世界の国々には食物さえまともにならない飢餓や水のない苦しみ、戦争による殺傷、…等々、昔から現在に至るまで、人間は、どのようなところにあっても、さまざまの労苦や心身の重荷が存在してきた。

そして、キリスト者となってもなお、病気や家族の問題などで、苦しみと重荷が終わることがないとき、祈ってもどうにもならないという心の深いところでの疲れ、重荷が生じることもある。そうした自分自身の体や家族の問題は、日々念頭から去ることがないからである。

祈っても祈っても聞いてもらえないと感じるとき、そのゆえに信仰から離れていく場合もある。しかし、無数の世界の人たちに数千年という長い間、力と慰めを与えつづけてきた神とキリスト以外にどこに苦しみや心身の深い疲れを真にいやす存在があるだろうか。

ここにあげた主イエスの言葉は、そのようなすべての疲れ、労苦し、重荷を負って歩んでいるものに対しての言葉である。

聖書にはこのような招きの言葉が多く見られる。聖書全体が、神の方向へと魂を方向転換させるようにとの招きの書だからである。

…さあ、かわいている者はみな水にきたれ。金のない者もきたれ。来て買い求めて食べよ。

あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。(イザヤ書55の1)

ぶどう酒とか乳という言葉によって、神の愛や力、励まし、あるいはその真実といったよきものを意味している。

聖書の最初に記されている 闇と混沌—それは魂の絶望的といえる状態であり、癒されない疲れ、労苦、重荷を負った状況をも意味する。しかし、そこに神は、「光あれ」と言われた。それは、光のもとに來れ、という呼びかけを内に含んでいるのである。太陽の光同様、神の光は同時に熱を持っている。冷えきった魂、固くなった心をも溶かす愛の光だからだ。

どうにもならない困難な状況、重荷をかかえた者であっても、この神とキリストの招きにこたえて主のもとに行くとき、ほかでは与えられない魂の休み、主の平和が与えられることは、キリスト者であればだれでも感じてきたことであろう。

この平安は、ほかの何者によっても与えられない主の平和である。それが日々さらに豊かに与えられるよう、そして願わくば私たちから周囲にもその平和が流れだしていくほどに豊かに満たされたいと思う。



緑なす草原の背後には、大雪山系の最高峰、旭岳をのぞむところにこのエゾコザクラがありました。

旭岳は、50年近く昔に、まだロープウェイなどなかったときに、重いリュックを背負い、層雲峡から登り、黒岳から旭岳そして天人峡へと縦走して以来のことです。

今回は、北海道瀬棚地区での瀬棚聖書集会のあと、札幌交流会、さらに教友のいる岩尾別や旭川を訪ねたおりに登る機会が与えられました。

この花は、登山道から離れたほとんど人が行かないと思われたところで見いだしたもので、予期していなかったところにこのような光景が現れたのでとても心に深く残ったものです。

草丈は、10cm程度、日本では北海道にのみ見られるが、千島やオホーツクといった寒冷な地域に分布するということです。こうした地域は夏はごく短いのですが、その短期間のうちに、芽を出し、このような美しい赤紫色の花を咲かせます。

サクラソウのなかまはいずれも美しいものですが、誰一人いない広大な自然のなかで静かに咲いている姿はとりわけその清い美しさが印象的です。

人間が造り出した美というのもそれなりによいものですが、こうしたいっさいの人間の手がかかっていない高山植物の美は、比類がないものです。それは人間の曇りやすい心や考えが混入することがまったくないもので、神ご自身の持たれている完全な美のあらわれだからです。

周囲の緑の草はらもまた、生き生きとした希望といのちの力を感じさせてくれますし、背景の山は神の力をそのままに表しています。

…私は山に向って目を上げる。わが助けはどこから来るか、天地を創造された神からくる。（詩篇121）

山を歩き、その自然のただなかにいるとき、この3000年ほども昔の聖書の詩人の言葉が思いだされます。山々とそこに広がる大自然は、私たちの心を神に向けてくれる純粋なものを豊かにたたえたものです。このような広大なひろがりをもった自然、そしてそこに咲くこの花の姿は全体として、人間世界とは全く異なる聖なる世界を指し示してくれるものとなっています。

主イエスは、野の花を見よ、と言われました。たしかに、こうした野の花を見つめるとき、そこに見えざる神の御手がはたらき、このように神の栄光を表しているのを感じるのです。

（文・写真ともにT. YOSHIMURA）